

アルパック ニュースレター



大正住宅博覧会一箕面市桜ヶ丘の洋館通り（本文中に関連記事があります）

アルパック ニュースレター もくじ

1997年3月1日

- 車いすとまちづくり 2
- ケニア便り その5 5
- 博覧会が生んだモダンな住宅と街並み 8
- 伝統文化の伝承でまちおこし 9
- 「うらしま太郎」疑似体験 10
- トンボ池をつくってみませんか 10
- 町民が誇りを持てるまちづくりを目指して 12
- 新刊旧刊書評紹介 13
- まちかど 14

NO. **82**

車いすとまちづくり

小林 祐造

これから21世紀の前半にかけて本格化する高齢化社会において、生活基盤である地域を、この地で生活するすべての人々が「いつまでもここに住み続けたい」と望むような愛着と温もりのあるまちにするためには、地域の人すべてが社会活動に参加していくための、移動や活動のしやすさが確保されていなければならないといわれている。

そのために、見つめる視点が誰を対象としていくかになり、障害者と高齢者だけでいいのか、一時的なハンディキャップを持った妊婦、けがをした人、重たい荷物を持った人も移動するにはそれ相応のハンディを持った人たちであるとの視点に立って考えていく必要があるのではないかと考えている。

視点を変えた福祉のまちづくりへの取り組み

これまでのまちづくりから一歩進めるためには、今までのように「障害をもつ人たちにとって、物理的障害を取り除いた地域・都市環境づくり」を中心とする視点だけでなく、より人間的な次元で“福祉のまちづくりを見ていく”とする考え方で、①人間性が尊重され、②自主・自立が確保され、③協働による積極的推進を行い、④まちにおいて実行していく行動力とがスムーズに連携し合わなければ、まちづくりは点的整備で終始してしまうということ。

これからは、点だけでなく線的なつながり、面的な広がりを持たせるという視点にたった五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）にやさしい住みよいまちをつくっていくための4つの取り組みが必要と考える。

①お互いを理解し、尊重し、支え合う心と行動力に満ちたまちづくり

お互いが「相手の立場を理解し」「相手の人格を尊重し」「支え合う」心と行動力に満ちたまちをつくり出していくことが基本的要件である。

②一人ひとりが生涯にわたって、自主・自立した生活の中で安心して暮らしていけるまちづくり

「住み慣れたまちで」「健康で安心のある自立した生活」ができるよう、自らの考えと判断に基づいて、個人の意欲と能力に応じて主体的に社会参加し、自己の力で生活していけるまちづくりが必要である。

③一人ひとりが行政と協働し、関係機関相互の連携・協働への強化

「地域への関心」「地域愛着」を持てるよう、お互いの能力や創造力を発揮し、お互いの連帯意識や行政、関係機関も含めた相互連帯・協働のもとにそれぞれが役割を担いながら共に支え合い進めていける社会連帯の強化された体制づくり。

④住民も参加した面的整備に発展した五感にやさしいまちづくり

まちづくりを行政まかせとせず、民間エネルギーの「開拓性」「柔軟性」「商店街・自治会での取り組み」を活かしながら、面的整備を発展させ、連続性が生まれることによる、行って見たくなる、歩いてみたくなる、愛着の持てる場所を多くつくる。

これらは、行政にまかせておくだけでは出来ない事であり、住んでいる人たちの積極的な行動が逆に求められている時代であるとい

える。

福祉のまちづくりの基本的な視点

街には多くの人たちが住んでいる。このことからすべての人にあった福祉のまちづくりなどあり得ない。

福祉のまちづくりのねらいは『障害者や高齢者などハンディキャップを持ったすべての人個人個人の社会活動、文化活動など幾多の日常生活を保障していく視点に根ざしたものであり、日常生活を営むための保障手段としてだけでなく、基盤としての整備』方法と位置づけるべきであり、そこには、以下の7つの視点でチェックする事が必要となる。

○身近なところから

福祉は「近隣の人たちに対して自分が何が出来るかを自らに問いかけることから始まる」のが原点とされている。さりげない人々のふれ合いと思ひ合いの中から、つまり日常生活の周辺から出発して、それを連帯の輪として住んでいる街に広げていく活動として、自分の身近なところから手作りのまちづくりを進めていく土壌づくりが重要である。

○支えるための基盤づくり

都市計画、建築、住宅、交通などに対して、行政と民間を含めたあらゆる分野に福祉的な視点を当然必要な要素として組み入れ、物心両面にわたる意識の変革が必要となる。

○どこでも使いやすさは同じ

都市施設整備はどうしても経済・能率・デザイン優先の傾向が強いことからその場での解決がなされており、利用する側から見れば、だれでも、いつでも、どこでもその使いやすさは同じとする視点が重要になってくる。

○だれでもが使える

すべての人が共有するものは、障害者や高齢者にとっても使いやすいものにしておかなければならないと考え、特別な設備として専

用化するものは極力少なくしておく視点が大切であり、その方がお互いの理解を得やすいといえる。

○安全性の確保

目的地に到達するまでの間の安全性を目的とした都市施設・設備（ガードレール・車止めポール等）は、障害を持つ人たちにとってはむしろ危険な状態を生み出すことさえある。

基準と共に安全性の確保という視点を持つことが重要になる。

○つながり・広がりをもたせる

点的整備が個々の整備で終わるだけでなく、お互いに連結し・連続し、つながり立体的な広がりをもつことによって、行って見たいくなる・歩いてみたいくなるという気持ちのいい都市施設として整備されるならば成功といえる。

○生活にまで入り込んだ広がり

ここでは、自宅や事務所など個人領域（特定の人しか入れない）においても視野に入れておくことが必要であり、施設整備だけでなくソフトな心の問題としての「支え合いのシステム」を連動させることが重要である。

まずは実践あるのみ

～車いすでまちを歩いてみたら～

ことばより実践ということで、茨城県立医療大学作業療法学科の学生と車いすマラソンに現役参加の奥村さんとお願いして実際のまちを車いすで歩いてもらった。

その差は一言でいうと「車いすに対する技術の差」ということができる。奥村さんの操る車いすは前輪の使い方と後輪の使い方が理にかなっているし、体重の移動も含めて車いすを走らせる為の体重移動であって学生2人の駆動輪を回すためだけの身体の振れとは大違いである。

歩いたコースは2カ所。1コースは歩道幅員3mで歩道縁石高さ15cm、住宅地であるこ



写真1



写真2

とから14%勾配のついた切込部分が随所にあるが歩道上に障害物が出ていない場所であった。学生たちが困難だった場所を挙げると、①敷地から砂利が持ち出され、砂利に車輪が取られ滑ること、滑るのではないのかという不安、②歩道切り込み勾配部分は水である車道側に車いすが持っていかれるので平らな部分へと意識的に寄る(写真1)、③横断歩道の場合歩道側の勾配が緩やかなためにそう苦にならないものの、道路横断を行った歩道切り込み部の2cmの段差乗り越えは車が来るというあせりのためかかなり苦勞をしており、同じ2cmでも状況が違えば同じということでは無いと感じたとのこと、④歩道上にあった33%勾配部(写真2)、というように勾配のついた場所は倒れそうな不安から自然に力がいって親指と三角筋が痛く、奥村さんにとっては「何でこんな普通のところを歩かなければ行けないの?」とでもいうように我々が歩く倍近い速さで苦もなくコースを回ってしまったものであるが、歩道について雨水を車

道側に流すためにつけられている2%勾配に対しては、車いすを車道側に持っていかなれないよう車道から遠い場所を歩いている(それが基本とのことであるが・写真3)のが印象的であった。

コース2は歩行者の多い駅前から1.5kmほど離れた公園までのコースであり、歩道幅員3mで歩道縁石高さ15cm、切込部分は商店街ということから少ないものの、床の仕上げはタイル張りで歩道上には店舗の看板・自転車等の障害物がはみ出している。

車いすで歩きながら行った行動と感想を追ってみると、①化粧タイルがはがれた部分に車輪を取られ前のめりになりあわてて体重を後ろに反らす、②横断歩道手前にある長さ5mの17%勾配は信号待ちするには恐いし決心がいる、③タイル張りの目地と2%の勾配に対しては車道側の手の回転は1.5倍ほど多くなり、④看板等が迫り出していることから3mの歩道幅員も狭く感じ、⑤人の目が自分の目の高さがないことから相手が気づいてくれているのか不安、⑥化粧の歩道版の多少の段差が直接腰に響いてつらい、⑦歩道と交わる交差点の角まで遮蔽物があると不安がまず先に立つ、⑧タイル張りで4%勾配のためか車いすがまっすぐ走れず車道側に流れ車いすの速さはぐんと落ち歩く速さに近づく。

祭りで人出が多かったにも関わらずこども



写真3

奥村さんにとっては苦もない場所であったようである。奥村さんの動きを見ていると勾配に対するコースの取り方は見ていて感心するほどプロとアマの差を見せつけられているようであったが、最終目的地にある公園の障害者用トイレに至る 1.5m程上がるスロープは見ていても力が入っており、福祉のまちづくり条例の施設マニュアルで規定されている基準に沿っていたとしても車いすでまちを歩くことは困難を伴うことだということを実感させてもらった二日間であった。

最後に、奥村さんの車いすで出かけるとき「障害者用駐車場」と「便所」のどちらが欠

けていても行けないとの話は考えさせられるものであったが、車いすですべて歩いてもらった歩道は『問題なし』の言葉には、体力のある人・ない人、介護者、高齢になってから車いすを使うようになった人など、新宿御苑の近くに住んで散歩を楽しんでいる車いすに乗った老夫婦のように、点字ブロックの上は避けて通り、今回体験してもらった学生と同じような状態の人もいることを考えると、やはり、立場別・問題別に細かく整理した『やさしいまちづくり』がいるということに再び気づかされたものだった。

(東京事務所 こばやし ゆうぞう)

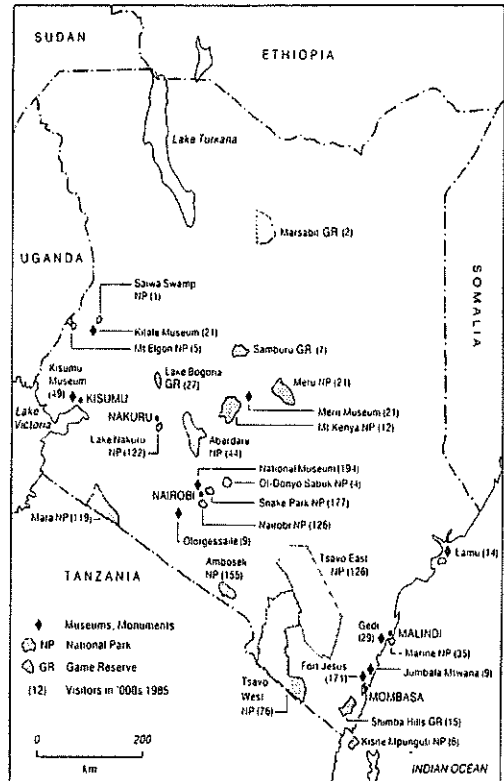
ケニア便り その5
ケ ニ ア 観 光
山田 克雄

ケニア観光の魅力は、雄大な自然とそこに生きる野生動物に代表されますが、その他にも海岸地域のリゾート地など、魅力ある観光資源を数多く持っています。

ケニア観光の歴史

野生動物の最後の楽園として、驚嘆すべき雄大なアフリカの自然についての感激を1935年にここを訪れたヘミングウェーが書き残しています。1948年に東アフリカの観光協会が設立され、今日につながるケニア観光の歴史が始まります。1963年の独立時には、既にケニアへのツーリズムは確立され、1954年には5千人余りの観光客であったのが、1965年には19万人を数えるようになっていました。自然と野生動物の保護を目的とするナショナルパークが1964年にナイロビ市郊外に最初に指定されて以来、1980年代には42ヶ所のナショナルパークを全土に数えるようになりました。ケニアには、1985年に54万人、1994年に86万人の観光客が訪れています。

図1 ケニアの主要観光地



Source: Tourism and Development in Africa

大きな観光収入

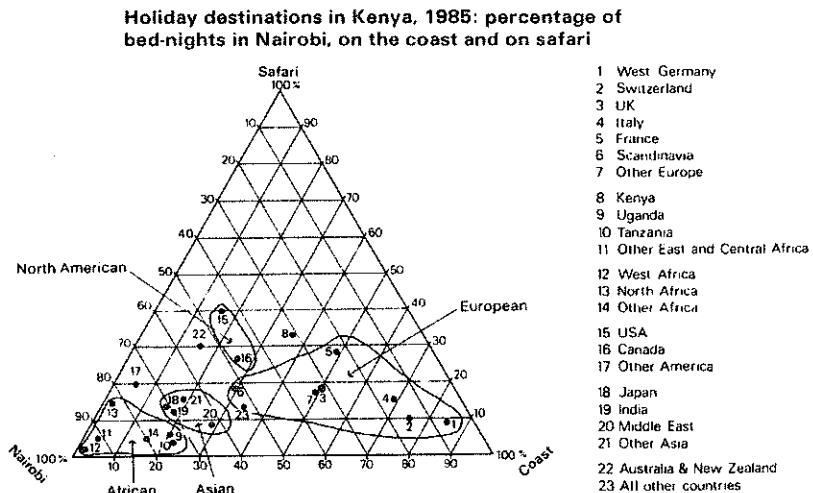
国民総生産では農業が最も大きい位置を占めるケニアですが、観光関連産業は農業に次ぐ規模で、外貨獲得において大きな割合を占めています。1994年の統計でみますと、86万人の観光客による観光収入は、280億シリング（1994年価格で約620億円）であり、国内産品の全輸出額の3分1に相当する額となっています。しかし、1980年代に大きく伸びたケニア観光もここ数年は、ケニアを含むアフリカ地域の不安定な政治情勢、周辺国であるタンザニア等との競合、AIDSの流行などの諸要因により伸び悩んでいます。最近の統計である1995年は、前年より2割も少ない69万人に減少しましたが、その理由としてこの年に話題になったエボラ出血熱の影響があります。今後の観光面での発展を予測することは、なかなか難しいですが、アフリカの中ではよく整った宿泊施設と第1級の観光資源を持つことから、条件が整えばさらに発展していくことが考えられます。しかし、こちらのエージェントの話では、来年は総選挙の年で

あることから、選挙に伴う政治的な混乱が激しくなることが予測され、厳しい年になるとの見通しもあります。

ケニア観光のスタイル

観光客はアクセスの良いヨーロッパからが中心となっていて、全体の5割以上を占めています。次いでアフリカ周辺国、アメリカとなっており、ちなみに日本人の観光客は、1995年で年間1万人、そのうち9千人が観光目的となっています。金持ち日本人観光客への期待は大きく、どの観光地でも「こんにちわ」「安いよ」などと日本語で呼びかけられます。すし古いデータですが、国別観光客の面白い行動分析に関するものが見つかりました。図2に示すように、宿泊地別に各国観光客の割合を示したものです。ケニアの観光行動は、自然公園でのサファリー、コースト地域でのリゾート、ナイロビ滞在に大きく分けることができますが、観光客の出身国によって大きな違いがあるのが分かります。西ドイツをはじめとするヨーロッパ人は、コーストのリゾートでゆっくりと休日を過ごすリゾート型の

図2 国民別・目的地別観光客分布状況



Source: Tourism and Development in Africa

パターンとなっています。特に、寒い冬場は太陽の輝くアフリカが大きな魅力となっていて、海岸で飽きもせず肌を焼いているヨーロッパ人に感心します。滞在期間の平均は長く、西ドイツで12日間となっています。一方、日本をはじめとするアジア人については、図2のグラフで見ると真ん中に位置していて、各地域に分散される行動であることが分かります。日本人の滞在期間の平均は、わずか3日と短く、忙しく観光地をめぐる姿が浮かびます。アフリカ人については、ナイロビ中心で買い物やビジネスが目的となっているのででしょう。アメリカ、カナダ、オーストラリアからの訪問者を見ると、また違った傾向があるのに気づきます。アメリカ人の平均滞在期間は6日で、サファリーの比率が高くなっています。自然指向の強い国民性というか、雄大な自然を持つ母国と異なったアフリカの自然と動物に強い関心を示している様子がみえます。これらの行動パターンは、観光・リゾートに対する国民性の違いが端的に現れています。さて、あなたならどのようなケニア観光を行ってみたいと思いますか。

ケニアのモデル観光

ここで、日本からのケニア観光についての典型的なモデルを考えてみました。もし、十分なヒマと少しばかりの金があれば、大きなリュックを背中にしよって世界をまわっているバックパッカースタイルで各地をめぐり、アフリカの生活を肌を感じる手があります。しかし、それにはかなりの行動力と多少のリスクが要求されますので、ここでは平均的なケニア観光について紹介します。

まず日本からケニアへのルートですが、直行便がなく北廻り（ヨーロッパ経由）か南廻り（アジア経由）になります。ケニアについては、まず何よりもサファリー旅行が考

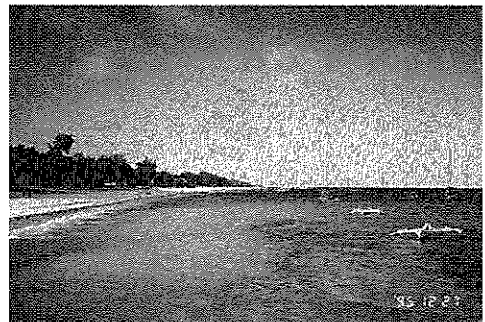
えられます。ナショナルパークによって動物の種類も自然もかなり異なりますが、マサイマラ、アンボセリ、サボといったパークに人気があります。ナイロビに到着して後、空路（軽飛行機）と陸路で行く方法がありますが、時間を節約し疲れずに行くには空路がお薦めです。その他にフラミンゴで有名なナクル湖へ足を伸ばすことも考えられます。サファリー旅行の後は、モンバサ、マリンディといったインド洋に面したマリーンリゾート地を訪れ休養するのが一般的な旅行コースです。モンバサへは空路と鉄道がありますが、鉄道を利用する旅も大変おもむきがあります。イスラム文化圏の歴史的なスワヒリタウンとして有名なラムを訪れるのも良いと思います。日本人の平均滞在日数3日ではとても足りませんので、1週間以上ケニアに滞在することをお薦めします。

カリブ（ようこそ）ケニア。

（京都事務所 やまだ かつお）



マサイマラの草原



モンバサの海岸

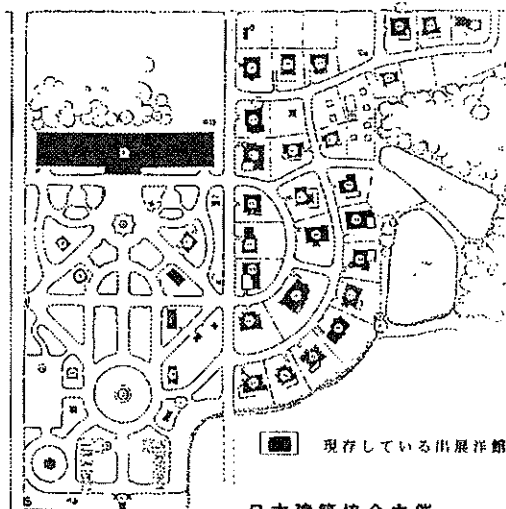
博覧会が生んだモダンな住宅と街並み 一箕面・桜ヶ丘洋館通りパネル展一

重本 幸彦

1922年（大正11年）に大阪の郊外の箕面市（当時は箕面村）桜ヶ丘で、この種の催しの我が国での先駆けである「住宅改造博覧会」（社）日本建築協会主催）が開かれた。2ヶ月間で入場者7万人を集めたという。

そのねらいは、我が国住宅の洋風化・近代化で、当時、事務所や学校には普及済みのイス式生活などの住宅への導入が呼びかけられ、その結果、大林組などによる25軒の出展住宅のほとんどがモダンな洋館となった。その間取りも、和風住宅の一角に洋風応接間を作るといった和洋折衷ではなく、洋間主体である。防災や衛生面も強調され、当時は井戸水利用や汲み取り便所が一般的な中で、蛇口をひねると水が出る上水道、水洗トイレ（浄化槽式）や2階トイレなどを整備。中流向け住宅ということで、延べ床面積は100～150㎡程度だが、敷地は約300㎡と今からみると広い。

また、洋館群は見晴しの良い丘の上に建ち



日本建築協会主催
「住宅改造博覧会配置図」



現存する住宅改造博覧会出展住宅（大林組出品住宅）半円状の街路など、多分、我が国初に近い（東京の田園調布より少し早い）郊外での田園都市づくりがイメージされている。

この博覧会が提案した住宅洋風化の全てが、我が国に根付いた訳ではないが、その方向は先見性を持っていたといえよう。

75年たった今、この洋館通りでは、9軒の出展洋館（直後のものを含め10軒）が現存。地域での敷地の細分化も少し進んでいるが、アンチックな洋館を中心に緑豊かな1戸建て住宅街の街並みを保っている。当初の良好なストックの整備とそれを守り成熟させる住民の努力、そして何より自らの家や地域の由緒への愛着と誇りが、良い街並みの保全につながっていると思われる。

この1～2月にかけて箕面市内で桜ヶ丘洋館通りの「パネル展」が、みのお市民まちなみ会議（市民である所員2名が参加）の手で開かれ、街並み保全を市民に訴えた。

（パネル展の情報は、次のホームページで提供中（但し、当分の間）=<http://home.interlink.or.jp/~ar-osaka/index.html>。参考文献：「大正『住宅改造博覧会』の夢」1988年（株）INAXなど。）

（大阪事務所 しげもと さちひこ）

伝統文化の伝承でまちおこし
余呉町交流促進センター整備について
西田 昌治

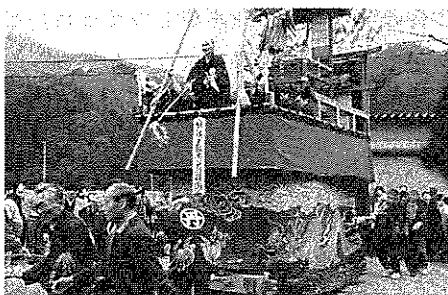
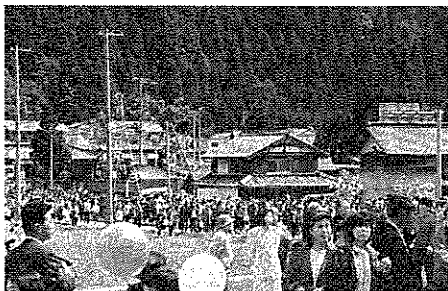
滋賀県の最北端に位置する余呉町は、菅原道真の誕生の地、余呉湖や天女羽衣伝説など自然と伝説で彩られた魅力的な町です。このまちに湖国の奇祭「ちやわん祭り」があります。

現在、町では丹生ダムの建設により水没する農山村の文化・歴史的民俗資料やちやわん祭りの曳山、天女羽衣伝説などの保存・展示・伝承を行う「余呉町交流促進センター」の整備を進めており、私どももお手伝いさせていただいています。

私は建築と連携し、外構周りの実施設計を担当しています。本館とともに施設の目玉として、シンボル性を強調し玄関口としての演出を図る建物と一体化した滝や、ちやわん祭りの曳山を巡行させる祭り広場ゾーンなどを計画中です。

湖国の奇祭“ちやわん祭り”

私はまだ、ちやわん祭りを見たことがありませんが、余呉町上丹生の丹生神社で三年に



写真上下とも“ちやわん祭り”

一度行われ、県の無形民俗文化財に指定されています。祭りに使われる三基の曳山は、足利時代から伝わる曳幕と江戸時代からの綴錦の見送りをつけ、二月前から身を清めた山作り（工匠）たちが作り上げます。歌舞伎などから芸題を取り、その場面を茶碗や皿、花瓶、人形などを組み合わせ、約10mの高さに積み上げられ、華麗さと絶妙のバランスが特徴だそうです。また、独特な祭りばやしがあり、渡御道中は足利時代の絵巻を、稚児の舞は足利文化の舞台を思わせます。

祭りは、この余呉町交流促進センターの整備に合わせ、今後は毎年開催される予定です。期待される若者の取り組み

過疎化が進む中、余呉町では、アウトドア施設である「ウッドライフ余呉」、「赤子山・余呉高原スキー場」、山菜採りや昆虫採集、釣り大会などが行われる「農林漁業体験実習館」、多目的研修施設「森林文化交流センター」などの施設が整備されてきています。

これらの施設を中心に、町の若者が活発に地域活動を展開し、施設の管理、運営に参加してきています。PR活動などでも、大阪の鶴見緑地や花月まで出向き、農産物などの特産品を出張販売するなど、町の知名度は着実に上がりつつあります。町の入り込み客数も昨年に比べて2割強の伸びを示しています。

新たな交流施設として来春オープン

さて、同センターは、平成10年4月に完成予定です。ちやわん祭りの開催時期が4月の第一週目の日曜日ということもあり、オープンの記念イベントも、この祭りを中心としたものになると思います。是非、同センターや祭りとともに、農村風景や地域の人々とのふれあいを楽しんでいただければと思っています。

(京都事務所 にしだ まさはる)

**「うらしま太郎」疑似体験
インストラクター養成セミナーへ参加
角南 禎子**

昨年の12月に(社)長寿社会文化協会主催の「うらしま太郎」インストラクター養成研修会に参加してきました。同研修会は、服部メディカル研究所所長の服部万里子さんを講師に2日間にわたり、開催されました。

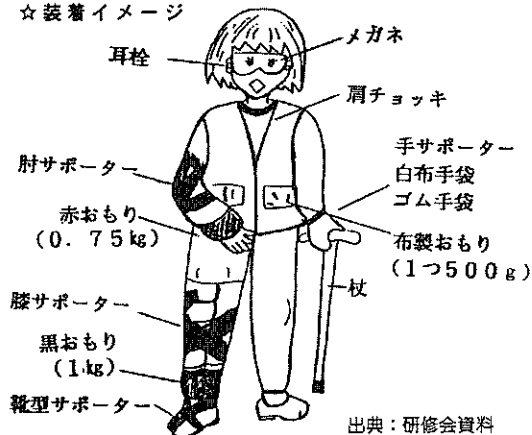
「うらしま太郎」とは、その名のとおり、うらしま体験できる装置（疑似体験セット）を装着し、80歳ぐらいの高齢者になった状態を擬似的に体験するものです。装置を装着することにより、目や耳の機能が低下したり、手足の関節が曲げにくい状態になります。

老化は通常十数年の経過で進行しますが、疑似体験では急に老化体験をしますから、転んで怪我をするなどの危険が伴います。インストラクターの研修では、大まかにそのような体験中の危険防止や、体験する人に合わせたコースの企画立案、老化（お年寄りの身体的な特徴）の説明、正しいセットの装着などを研修しました。

研修を受ける契機となったのは、大阪府下の「福祉のまちづくり」重点地区の整備計画に携わっていることもあり、そこでの連絡協

高齢者疑似体験セットの装着

☆装着イメージ



議会のなかで、インストラクターを招き、このうらしま体験を行ったことです。地元の企業や業者さん、行政の関連課の人に体験してもらうことで、実体験として理解と協力を得るとともに、よりリアルな福祉改善計画を作成することが目標でした。

これからは、今まで以上にバリアフリー、高齢社会に視点をおいたまちづくりが当たり前となっていきます。そのなかで、コンサルタントとして具体的に適切な体験と、認識をしてもらえる機会や場面づくりを提供することが大切だと思い研修に参加しました。（たいそうな意気込みで行った割には、知っているようで知らないことばかりで、セミナーに参加して本当に勉強させられました）引き続き現在の業務に、また、新しいまちづくりにもこの体験を活かしていきたいと思えます。

最後にご報告。レポート提出後約一ヶ月、今年2月4日に通知が届き、平成8年12月11日付けで、高齢者疑似体験インストラクターの修了証書をいただくことができました（ちなみに私は、第841号となりました）。

（大阪事務所 すなみ ていこ）

**トンボ池をつくってみませんか
畑中 直樹**

トンボ池づくりとは？

最近、新聞やテレビなどで、「学校の校庭で生徒の手によりトンボ池をつくった」といった報道をよく見かけるようになりました。このトンボ池づくりはここ5年ぐらいの間に、特に都市部の地域で急速に広まりましたが、一口にトンボ池づくりとは言っても、その目的や取り組み方は様々です。まず、一つ目



水面が樹木に覆われた作業前のため池（昨年9月）



地元の専門家などとの共同によるヘドロすくい作業（昨年12月）

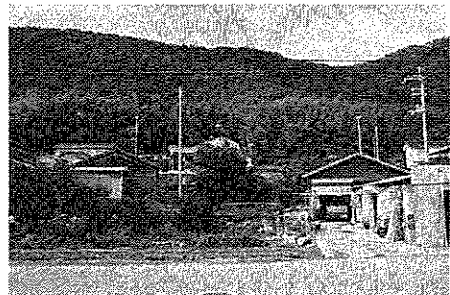
子供達への環境学習（教育）の一環としてのものです。子供達に生命の神秘や尊さ、自然生態系の仕組み、仲間と一緒に何かをすることの楽しさなど多くのことを教えてくれます。このタイプでは、横浜市がパイオニアですが、関西でも神戸市が全小学校に一つを目標に取り組みむなど、特に震災による被害の大きかった阪神間において「子供エコクラブ」と同様に盛んに行われています。次に二つ目が、まちづくりの一環としてのタイプです。「赤トンボ」という名曲（発祥は兵庫県龍野市）があるように「トンボ」という魅力的な生き物を題材にすることで、地域の人々が集い、自らの身近なことについて目を向けるきっかけにしようというものです。ちょうど「ホタル」による地域おこしや生活（排水）の見直しと似ています。関西では、芦屋市内などでこのタイプの取り組みがみられます。そして、最後は、近年よく耳にするようになった「ビオトープ」や「エコ（ロジカル）アップ」といった生態系の保全・復元の観点からのもので、古くは高知県中村のトンボ王国や最近では公共による公園整備の中での取り組みなどがこのタイプといえます。

里の小ため池でのトンボ池づくりの試み

このようにトンボ池づくりを大雑把にタイプ分けしながら紹介しましたが、現在「兵庫ビオトープ・プラン」の中の試みとして高砂市内の里山のふもとの農村集落の中にある個

人の方の小さな農業用ため池（約6×10m）で取り組み中です。これを題材としたのは、郊外部に比較的多く分布する一方で、公共事業の対象にもなりにくく、ややもするとなくなってしまうか、もしくは放棄されたり生活排水で環境が悪化したりしていることの多い水辺を手軽に保全・復元できるビオトープ・ネットワーク上の資源として活用する方法を得るためです。具体的には、従前の動植物の簡単な把握、水質の測定を経て、水面を覆いかつ池底のヘドロの原因となっていた池畔の樹木の剪定、長年池底に積もったヘドロすくいが概ね終わった所で、今後、隣接する農機具小屋の天水を池へ引く水循環系統と環境推移帯となる浅場づくり、水生植物の移植を春までに終える予定です。そして、春から秋にかけて数回調査し、トンボも含めた動植物の従前従後の比較、近くの池との比較から、効果の把握や手法の改良をする予定です。来秋くらいにまた結果のほどをご報告したいと思います。

（大阪事務所 はたなか なおき）



里山のふもとの農村集落の中にある今回のため池

町民が誇りを持てるまちづくりを目指して
～歴史的価値のある民家を活用～
金井 萬造

先日、広島県呉市の沖の下蒲刈町を訪問した。同町は、瀬戸内海上交通の要衝で、海駅として古くから栄えた。町内には三之瀬御本陣跡、船着の便をはかった長雁木などの多くの史跡があり、水軍や諸大名、朝鮮通信使の寄港地として栄えた当時の様子がうかがえる。

現在、竹内弘之町長が、21世紀は「心の時代」と、文化と歴史を掘り起こし、豊かさを育む文化のまちづくりを進めている。

町内史跡整備だけでなく、全国各地の建築的価値のある古い民家を移築して、美術館、資料館などの公的施設として活用する手づくりの運動に特徴がある。

広島県などの協力を得て街路、植栽などの基盤整備をした上で、専門家に助言、指導を得て、古い民家を無償又は有償で譲り受けている。移築は、町民のボランティアにより民



出典：下蒲刈ガーデン・アイランド構想計画報告書（下蒲刈町）より

家を解体し、町まで移送し、さらに地元の大工さんが再築している。費用は、ボランティアにより解体・移送・再築をしているので、運搬にかかる経費程度ですんでいる。

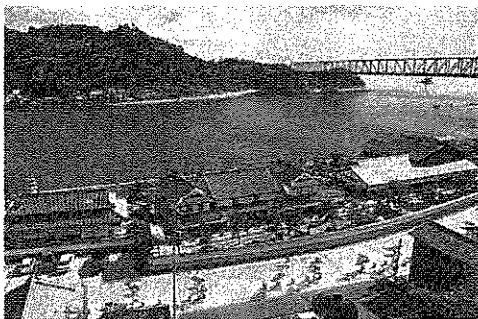
また、この移築活動を通して、参加した町民の感性を育てるばかりでなく、完成した建物や郷土への愛着が生まれ、まちづくりの次のエネルギーが仕込まれている。

現在、施設は「松浦園」と命名され、「御馳走一番館」（旧有川邸：朝鮮通信使資料館）、「あかりの館」（旧吉田邸：日本灯火器、西洋ランプの展示）など5棟（内1棟は復元）が整備されている。（注：「御馳走一番館」とは、江戸時代に朝鮮通信使が寄港した際、下蒲刈島が藩の外国の玄関口として歓待した。その様子を「安芸の蒲刈御馳走一番」と幕府に注進した記録による。）

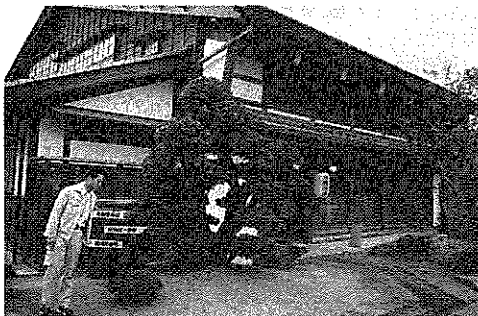
今後は、これらの施設間のネットワークや管理・運営の工夫や関連イベントの創出で、施設の一層の活用が可能と思われる。

下蒲刈町は、平成11年に安芸灘大橋が完成し、本土と結ばれ、離島でなくなる。完成までに町の文化と歴史を掘り起こし、個性あるまちづくりを進めておきたいという町長の思いを感じた。

（大阪事務所 かない まんぞう）



松浦園全景 出典：パンフレット



「御馳走一番館」（旧有川邸：朝鮮通信使資料館）

新刊旧刊書評紹介

林 完次 著

光 琳 社 出 版

『宙ノ名前』

紹介 飯島 千歩

“^{すみれ}菫色でもないし、^{かきつばた}杜若色でもありませんが、黄昏どきになると、辺りが一瞬、そんな色に染まるときがあります。私の好きな時間帯です。樹木も、建物も、行き交う人の顔も、皆その色になるのです。(中略)”

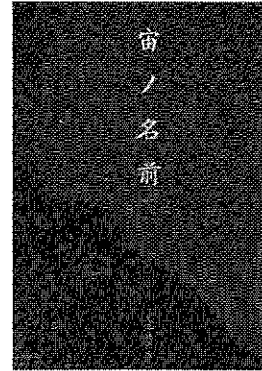
天体写真家で、日本天文学会員の著者は、この本を出版するにいたった経緯をあとがきにこのように記しています。“窓を開けたときの、夜の匂いがするような星空の写真”彼が撮り続けている写真のテーマであり、そのままの写真がこの本には、数多く掲載されています。

「^{そら}宙ノ名前」

1日を終え家路につく頃、ふと見上げると一面の星空、そして月。その1つ1つに名前があることなど、普段の生活の中では忘れられてしまうものです。名前を知ることから好奇心は広がり、“もっと知りたい”という欲求は膨らんでいくものです。

“夜空の名前を知ること”それは、知る必要のないもの、知らなくても何も困らないものかもしれませんが。あえて、この本を紹介しようと思った理由がここにあります。自分の身のまわりに名前を知らないものが多くあること、そのことが当たり前のように過ごしてきたこと。宙の名前を知ったことで、身近にあるものにあらためて興味を持つようになり、当たり前で疑問すら持たないのに、知らないことが、意外と多くあることに気づきました。

季節、時間、そしてその形によって、月には約80もの名前があることをあらためて知りました。そんな夜空に関する名前が、月ノ章・夜ノ章・天ノ章・春～冬ノ章に記されてい



ます。また、昔はもっと自然が身近だったことを痛感させられる宙の名前に関連する和歌や、俳句も併せて紹介されています。

風に少し春の訪れを感じるようになってきたこの季節、夜空には牡牛座の肩先に有名な“昴”＝プレアデス星団がみえます。ちなみに、この本にはプレアデスに関する名前が25も掲載されています。

もし今日晴れていたら、久しぶりに夜空を見上げてみて下さい。そこには微かなひかりを放つ星や、月がみえるかもしれません。そして、その名前をこの本のどこかで見つけたとき、何か楽しくなる気分を味わってみて下さい。

既にご存じの方もいるかもしれませんが、この本の他に、「空ノ名前」という昼間の空に関する本が出版されています。この本では雲や、風の名前を知ることができます。これらの本の帯には“上を向いて歩こう”と書かれています。そらがきれいなところに行く機会があったら、子供ころに戻ってこれらの本を片手に、そらを眺めてみるのも楽しいものです。

(名古屋事務所 いいじま ちほ)

まちかど

いかに見るか・見られるか

坂井 信行

いつものまちの見慣れた風景の中に新鮮な輝きを見つける。これが最近の私のタウンウォッチングのテーマです。普段は気にも留めないようなことにあえてこだわってみる。そうすれば何気ない日常の中にも新しい何かを発見できるかも知れないという期待。誰もが見過ごしている視点から「いかに見るか」ということが私の興味の対象なのです。

それからもう一つ、自分自身も“風景の中にいる”ことを意識しはじめたとき「見る・見られる」という関係が重要になってきました。私が風景を見ているのと同時に、私がいる風景を誰かが見ているのです。しかし、この「見る・見られる」という関係は通常は意識することは少ないものです。

日常を離れた旅先では見るもの全てが新鮮です。この場所にはもう二度と訪れることはないかも知れないと思うと、できる限りのものを目に焼き付けておきたくなって、そうするとさまざまなものが見えてきたりもします。

そんな旅の途中、バルセロナの目抜きランブラス通りで見かけたご覧の彼女、白装束に顔まで白く塗り、微動だにしないその姿は見事石膏像になりきっています。この“芸術的”パフォーマンスに足を止め、しばし見入っている人も少なくありません。

フランスと国境を接するカタルーニャの首都バルセロナは、ある意味ではスペインらしくない“ヨーロッパ的な”まちだといわれます。ピカソ、ミロ、ダリ、そしてガウディなど数々の天才、異才達を産み出してきたこのまちには、芸術を育む懐の深さがあるのでしょうか。

さて、この彼女は周囲の注目を得ようとボディランゲージを発しているわけで、道行く人々との間には「見る・見られる」という濃密な関係があります。彼女にとっての関心事は「いかに見るか」よりも「いかに見られるか」にあるようです。それは多分事実なのでしょうが、しかしそれだけでしょうか。なぜなら彼女自身、自分をとりまく人々を見ているはずなのです。つまり、彼女こそ誰も気づかなかった視点から、しかも簡単には真似のできない“芸術的方法”でバルセロナのまちを見ていたのかも知れません。もしもそうだとすれば、私はまんまと彼女に「見られて」しまった(!)わけです。

(大阪事務所 さかい のぶゆき)



アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673